

## ●寄付金が郵便受けに投入される 1月24日午前中

事務所のポスト受けにどなたかが、和紙風の封筒にパンダ模様のシールを張って、「里山の会様 寄付です がんばってください」と直筆で記載された寄付金が投入されていました。郵便切手は貼ってありませんでしたので、わざわざ里山の会の事務所までお届けいただいたことになります。大変ありがとうございます。感謝いたします。これまでの25年間の活動を通じて、直接里山の会の郵便受けに寄付金が届けられたことはなく初めての出来事です。どこのどなたかは判りませんが、私たちの活動をご覧になって、賛同激励をいただきまして、大変ありがたいことと深く感謝いたします。激励に応えられるように奮闘するつもりです。ありがとうございました。

## ●炭焼試行

3年間炭焼を休んできました。年末に炭焼小屋周辺を整理整頓したところ、原木が炭焼き2回分あるのを確認しました。このまま放置するのはもったいないと判断し、新年第一回目の事務局会議でダメもとで試行を決定しました。太田さんが得意のインターネットで炭焼方法を検索し、会誌48号掲載された南五晴さん手順書を参考勉強されて、試行に挑んでいただきました。炭焼窯の規模は軽トラックに山盛り3台分約1.3tの原木が必要で、300kgが生産される大規模なものなのです。窯の中の清掃、落ち葉などのかたづけや、通風路の確保に手間がかかりました。前日準備に半日以上時間が必要でした。そして土曜日の前日準備には太田、森島、大村、大釜さんの4人がかりで原木の投入を行い、投入口の閉鎖に神経を注ぎ、翌日26日の着火作業に備えました。26日には9時に太田さん、森島さん、大村さんが前日に引き続き着火作業に挑んでいただきました。長年使っていない窯なので、温度が上がるのだろうか大きな不安を抱えた取り組みでした。焚口が大きいので、火力が吸い込まれるよりも吐き出される方が多いという状態でした。徐々に要領がわかりはじめるまで苦勞をしました。朝9時頃からの着火から約11時間を燃やし続けて原木に燃え移って黒い煙から白い煙に代わり、木酢液が出るようになりました。翌日の27日8時の排煙の温度は75度で適温となって順調に進展していました。28日の5時の排煙温度は100度になっていて、白煙が激しく排出されていました。これでは空気の遮断は無理と判断しました。29日の午前8時には、白煙が途絶えないで、かなりの勢いがあり、135度です。遮断は夕方になるのではとの予想が伝えられました。ここまで燃焼が続くのは原木がかなり細かく割られ密集して詰め込まれたのではないかと推測されます。

出来上がって来る木炭が大変楽しみです。長年使っていなかったもので不安がありましたが、払拭されたようです。次の作業は酸素の遮断のタイミングとなります。多分29日の午後4時の確認でも白煙が変わりなく排出され致した。空気遮断は明日30日の午前8時再々変更しました。日月火水木の98時間4日間燃焼が継続したことになります。

## ●夏原グラントの2020年度ステップアップ事業への申請について 大議論を展開

22日の事務局会議では、申請できるように下書きを準備して、提案がされるようにすることでした。播川さんが四苦八苦しての提案がされました。実はこれまでの里山での栽培は何を目的にするのかという議論はなく、出来たから生産物をどのように処分するかとよく話し合いました。100円コーナーの設置や府営団地の月2回の販売が計画でした。それも昨年度は思うように販売が進まず、農園作業は年間を通じて赤字となりました。何よりも高齢化と人手不足が大きな原因と考えられます。世話をいただく皆さんは里山農園での栽培について二つの販売行動以外に見当たらない現状が続く、ピンチに陥っていました。

このままでは継続は無理であり、来年度への夏原グラントからの第2申請は無理ではないかとの結論になって、いました。29日の事務局会議ではこれ以上の継続は難しいとの意見が多かったのですが、提案された内容は、積極性に満ち溢れたプランでした。結局作成された提案では無理ではないかと議論の後、来週の事務局会議で最終結論を出すことを確認したにすぎませんでした。いずれにしても高齢化と人手不足、後継者不足が解決すべき一番の課題となりました。来週結論を出さねばなりません。

(この項：環境省発行の「日本の生き物たち」パンフから抜粋し掲載したもの)

## ●なぜ、絶滅危惧種が、増えているのでしょうか

生物を絶滅の危機に追いやる原因には、様々なものがあります。中でも開発による影響は大きく、絶滅危惧種の半数以上で減少要因となっています。その他、むやみな捕獲や採取、管理放棄で自然があられてしまう、外来種に食べられてしまう等、実に様々な原因があります。また、地球温暖化など地球環境の大きな変化の中で深刻な影響を受ける可能性のある生物もいます。ここでは、「人間の活動(開発/乱獲・盗掘等)」「自然への働きかけの縮小」「外来種」「地球環境の変化」の4つに整理して原因を考えてみましょう。

### 2 自然への働き掛けの縮小

自然に対する人間の働きかけが少なくなること、逆に失われてしまいます生物がいます。水田やその周りの薪炭林、採草地、萱場などの里地里山は、人間の生活に必要な環境として人の手によって維持され、そのような環境に様々な生物が長い時間をかけて適応してきました。しかし、産業構造の変化などにより里地里山が管理されなくなること、生息・生育に適した環境が失われています。例えば、薪炭林の木を切らなくなると林が暗くなり、明るい環境を好む生物は住めなくなります。採草地が放棄されると林に移り変わっていき、草原を好む生物はすめなくなります。

また、近年、このような環境の変化に加え、狩猟者の減少などによりニホンジカの数が大幅に増加して、シカの食害で急速に数が減少している生物もいます。

#### キキョウ

キキョウは山野の草地に生える多年草で、秋の七草としても親しまれてきました。しかし、家畜の飼料やかやぶき屋根の材料としての草地の需要が減ったことで、生育地である草地が人の手で維持されなくなり、各地で絶滅や現象が確認されています。

#### ツシマウラシジミ

ツシマウラシジミは長崎県対馬にだけ生息する日本固有亜種の小型のチョウです。食事とするヌスビトハギなどがシカによる採食によって大きく失われたことなどで、残された生息地はごくわずかとなりました。現在、日本で最も絶滅の恐れが高いチョウとなっています。

### 3 外来種

外来種とは、人間によって本来の生息・生育地から他の地域へ持ち込まれた生物のことです。外来種の中でも特に侵略性を持つ外来種(侵略的外来種)は日本の在来種を捕食することや、住みかや食べ物を奪うことなどにより、地域固有の生態系を脅かしています。特に、他の地域と海で隔てられた島には固有種が多く生息・生育しており、外来種の影響を強く受けます。

#### 外来種により減少した生物 ヤンバルクイナ

ヤンバルクイナは沖縄県北部のヤンバル地域にのみ生息する飛べない鳥です。1981年の発見時の個体数は1800羽程度と推定されていましたが、2005年には700羽程度まで数を減らしてしまいました。その主な減少原因となっているのが、外来種であるマングースによる捕食です。マングースは約100年前に沖縄に持ち込まれました。その後、その生息範囲を拡大し、現在も沖縄の生態系に深刻な被害をおよぼしています。

### 4 地球環境の変化

地球温暖化などの地球環境の変化は、私たちの暮らしや生物の生息・生育環境に深刻な影響を与える可能性があります。北極の氷が解けてホッキョクグマが生息できなくなることや、海水の温度が上がってサンゴが死滅してしまう恐れがあることはわかりやすい例と言えるでしょう。

日本では、2100年に地球の平均気温が3～4℃上昇した場合、気候帯が年間4～5km北上するという報告があります。こうしたことにより、高山帯や寒冷な環境を好む生物にとって、生息・生育に適した地域が全国的に減少する可能性が指摘されています。

#### 地球環境の変化により減少が懸念される生物 ライチョウ

ライチョウは北アルプスや南アルプスなど日本の高山帯に生息する鳥です。今後、地球温暖化が進行すると生息に適した地域の標高が上がるのが予想できます。このため、これ以上標高の高い場所に逃げ道のないライチョウは絶滅の恐れが高まる可能性があります。